

曹洞宗 蟠龍山 護国院 芳全寺

芳ほろれん蓮

2023 年初夏号

まことに一事をこととせざれば
一智に達することなし

Echo

対談：住職と徒弟

「今、私たちに求められている事」

玲音の仏教メモ

～お盆の"盆"ってなに？～

盂蘭盆について

令和の阿弥陀如来縁結び記念事業法要

芳全寺寺族 故荒木千代子儀 本葬儀 ご協力ありがとうございました



芳全寺の御本寺である結城市乗国寺住職 鈴木龍穂老師を導師に迎え、本葬儀を厳修しました

阿弥陀如来ご縁結び・ 令和の改修事業

此度、檀信徒の皆様方のご協力により、阿弥陀如来ご縁結び・令和の改修事業として本堂前のエントランス域の外構改修事業が無事に竣工いたしました。ご協力賜りました皆様方には改めて御礼を申し上げます。本堂入口前には広い踊り場を設け、入堂し易く、急だった階段を緩やかな石段に改修し、エントランスの導線を段差のないフラットな通路面としました。安全、安心にお参りしていただけることと存じます。

さる五月二日、絶好の日和にも恵まれ、当事業の竣工を阿弥陀如来様にご報告申し上げますとともに、ご協力頂きました皆様方と阿弥陀如来様とのご縁結びをさせて頂く為の法要を執り行い、ご寄進・芳名帳を阿弥陀如来様の体内に奉納させて頂きました。

阿弥陀如来様は、真摯に善因を積まれる方々を善果へと導く（極楽往生への橋渡し）為に自分を後回しにしてお勤め続けておられる有難い仏様です（仏の中の王）。

阿弥陀如来さまのそのような思いに少しでも応えるべく、私たちはこの自身の身（生かさず死なずの身）を自分の為だけでなく、「他者やこの地球の全ての物の為に活用していく」という視点「心がけ」を持ちたいものです。

大慈院秀室蓮芳千祥禅尼 大夜・本葬儀

現任職の母、荒木千代子は長きにわたり当山の寺族として芳全寺の護持運営に従事してまいりましたが、去る三月二十日、百五歳の天寿を全ういたしました。檀信徒の皆様方にはこれまでのご厚誼に深く感謝申し上げます。

大正七年、物部村東沼の橋本家の二女に生まれ、真岡女学校を卒業。昭和十八年、芳全寺の先住・荒木秀胤に嫁ぎ、直後に南方へ再応召となった夫に代わって寺の留守を守る。九死に一生を得て無事に帰還した夫と共に、戦後の復興期を生き、食べ物や生活用品が乏しく、自給自足的な生活の中、一男二女を生み、育て上げました。自分の時間などほとんどなく、寺の掃除や用務、家事、そして老母の介護に明け暮れて歳をとってしまったように思います。今思えば、大変厳しい環境での生活だった訳ですが、愚痴一つ言わず、もくもくと働き、かつ誰にでも穏やかに優しく接していた姿には今思い出しても頭が下がる思いが致します。

大慈院秀室蓮芳千祥禅尼

芳全寺の偉大なる母、いつまでも誇りに思っております。

合掌 荒木龍胤



法要動画・特集記事
スキャンしてご覧頂けます

3 上：久下田大仏胎内に御芳名帳を奉納する様子 下：晴天の空の下、久下田大仏を前に法要を行いました

対談

今、私たちに求められている事



対談形式の特集エコーと題して、当山住職荒木龍胤と、徒弟荒木玲音との対談をお送りします。題のエコーは仏教用語で功德を振り向ける意味の「回向^{えこう}」と、呼応・共鳴を意味する英語「エコー」をかけました。

現代におけるの仏教

徒弟 核家族化、高齢化、さらにはここ数年にわたり猛威をふるった新型コロナウイルス感染症などの影響により葬儀のあり方が変わりつつあると思います。住職は現代の葬儀についてどのようにお考えですか。

住職 まず葬儀式には二つの役割があります。

一つがご遺族が故人との別れを偲ぶ役割。

もう一つが、社会的に故人の死を周知する役割です。

その中で最も大切なのは、ご遺族が故人との別れを偲ぶ場である事です。ご遺族がどのような気持ちで葬儀に臨めるか。

そういった想いを、私達お坊さんがいかに汲み取っていくのが大切になると思います。

そして、葬儀が故人に想いを伝えられる場となるようにできればと思っています。

徒弟 亡くなってから葬儀まではご遺族も慌ただしく心休まらない期間であることは仕方ありませんね。

しかし、その中で私達のご遺族に何をできるか、何をどうやって伝えるかを考えていかなければならないと感じます。

葬儀を切り口に現代におけるの仏教を紐解いて頂きましたが、一仏両祖のみ教えに生きる私たちは今後どのような生き方を目指せば良いとお考えですか？



荒木龍胤 70歳

真岡高校卒

名古屋大学大学院修了
学校法人芳全寺学園 理事長
平成9年 芳全寺住職となる

今、求められている事

住職 先日、曹洞宗管長の石附

周行禅師より今年の方針である「告諭」が述べられていましたが、「四摂法」の「同事」を実践の柱とすることが求められています。

道元禅師は「同事といふは不違なり」とお教えになられました。「不違」とは、「ちがわない」と言う事です。何が何にどう違わないのでしょうか？人と人が互いに向かい合う時、「相手の立場になって」という事です。

相手の立場になって話合ひましよう、考え合ひましよう、これが教えられるところの「同事」であります。

私たちはいつも先ず自分を中心にして物事を考えがちです。つい「自我」が出てしまいます。それを相手に合わせて、同じ立場になって、と言うは易く行うは難しだと思えます。

徒弟 私も振り返ると、自分が自分が、ということを経験となく繰り返したことがあります。

住職 そうでしょう。でもそのことを自覚することがまず第一歩です。そして、それぞれ個性の異なる一人ひとりの相手と同

じ立場になるとなれば必要なのは「やわらかい心」です。

やわらかい心を持つ

住職 「やわらかい心」とは、

個性の異なる如何なる相手にも、自分のほうから合わせていく事の出来る自分の心持ちのことです。福祉の時代と称される現代に最も必要な心だと考えます。

徒弟 「同事の心」とは自分の心を相手に行きつかせる事、すなわち相手が自分の心を受けとって納得して頂く事ということですね。

住職 そういうことです。そこに大切なのが、先ず自分が自分に食い違い・偽りが無いようにということ。昨日の自分と今日の自分に違いはないか。先ず「確立した自分」があつて初

めて「同事」となる訳です。仏さまに手を合わせ、世界中のひとびとが誰一人取り残されることなく、安らかに暮らせるよう、お坊さんとして念じていきましよう。

徒弟 み教えの本質が少し分かった気がします。丁寧に日々の生活に活かすことが大切ですね。ありがとうございました。



荒木玲音 30歳 (芳全寺徒弟)

東北大学卒業

一般企業に勤務後、

大本山永平寺別院長谷寺にて安居

仏教を分かりやすく伝えるため勉強中

玉川大学教育学部通信教育課程在学中

玲音の仏教メモ

お盆の盆ってなに？

盂蘭盆 ~うらぼん~について

・知っているようで知らないお盆の由来

日本の夏といえばお盆！お盆といえば実家に帰って家族に会ったり、レジャーに出かけたりと、私たちにとって馴染み深い風習です。では、お盆の「盆」とは何のことでしょうか。

実は1300年も続く長い長い歴史があるんです。今回は馴染み深いけどあまり知られていない、お盆の由来についてお話します。

・目蓮尊者とお母さんのお話

お盆、正式には盂蘭盆（うらぼん）は、古代インド語で「逆さ吊り」という意味です。その「逆さ吊り」の苦しみを除く法要が盂蘭盆会です。

この由来は仏説盂蘭盆経ぶつせつうらぼんきょうに説かれています。

お釈迦様の弟子の目連尊者がある日、亡くなった自分の母親がどのような世界にいるのか神通力で探してみました。すると、母はなんと悲しいことに餓鬼道がきどう（飢えと乾きの世界）に堕ちていました。目連はこのことを釈尊に話し、母を救う方法を伺いました。釈尊は「安居あんごの最終日（旧暦の7月14日）にすべてのお坊さんに食べ物を施せば、そなたの母親にもその施しの一端が口に入るだろう」とお答えになりました。目連はその通りにお坊さん全員に施しを行い、お坊さんたちは飲んだり食べたり踊ったり大喜びをしました。

すると、その喜びが餓鬼道に堕ちている者たちにも伝わり、目連の母親の口にも入り、母は救われました。※盆踊りはこの喜びの踊り、死者に供養するための踊りが由来という説があります。

・1300年もの長い歴史！

この逸話が元となり、日本でも広く盂蘭盆会うらぼんえ（※）が行われるようになりました。

記録に残る日本最古の盂蘭盆会うらぼんえは657年に奈良飛鳥寺で行われました。なんと1300年以上前から伝わる行事なんです！

・なぜお盆に棚飾りを作るのか

では、なぜそのお盆期間中にご自宅に精霊棚を飾り、祖先を祀るのかについてです。

夏に精霊棚を飾る風習は元々、祖先に夏の恵みを感謝し、秋の実りを願うという民俗信仰でした。

その後、一般社会に仏教が浸透するにつれ、仏教の先祖供養の精神と合わさって、盂蘭盆会うらぼんえと共に行われるようになりました。

その時代時代の人々が先祖に願い、子孫に託した想いが紡がれて、今、皆様のご自宅の精霊棚につながっています。

・後世に伝えよう

今年のお盆はぜひ、おじいちゃん・おばあちゃんからお子さん・お孫さんに精霊棚の飾り方をお伝えされてはいかがでしょうか？

ご一緒にナスで牛、キュウリで馬を作ってみるのも楽しいひとときになりますよ。

※現在、多くの寺院では施餓鬼会せがきえと共に行われる「盂蘭盆施餓鬼会うらぼんせがきえ」が一般的です。

今年の芳全寺の盂蘭盆施餓鬼会は8月7日（月）14時より行われます。ぜひお参りください。



喜心、老心、大心の教え

「禅」と「働く」の関係

私が修行した大本山永平寺別院長谷寺をはじめ、禅の修行道場は、いわゆる「合宿生活」のようなスタイルで、基本的に修行僧自らが庭掃除やトイレ掃除、食事や事務作業などを分担して行います。入門したての頃には、坐禅や読経など自分の修行だけに専念できる時期もありますが、一定の期間が過ぎれば、様々な道場内の寮舎に分かれて「仕事」が割り当てられ、それに当たることとなります。

しかし時には、その「仕事」を嫌になるところがあります。「大きな法要が近いからその動きの練習をしたい」、「坐禅や読経に没頭したい」、などと自分本位に考えたことがお恥ずかしながら一度や二度ではありませんでした。

そんな様子の私の雰囲気を感じ取ったのか単頭老師という修行僧を直接指導する方の中でトップの方から、こう声かけられました。

「玲音！ 働くことが修行だ」

私の頭に？マークが浮かんでいることを悟ったのか、道元禅師の言葉を引用し教えていただきました。

自分に順番が巡り、修行道場の役に就き仕事を務めることになったなら、喜心、老心、大心という三つの心構えをしっかりと持たなければならぬ。

第一の喜心とは、自分の為した務めが誰かの役に立ち、自分の存在

が誰かの生活を支えていること、そうした巡りあわせで仕事ができる喜びを感じることに。

第二の老心とは、老婆心ともいい、老婆が孫を思うように、また親子を思うように心を尽くし、相手

を思い、仕事に当たること。第三の大心とは、大きな山のようにどっしりとした、偏ったり固執したりしない心を持つこと。浮かれも落ち込みもせず、物事を俯瞰し、成功も失敗も一つの景色の中に一緒にとらえる心を持つこと。

こうした心構えで務めるならば、どんな種類の仕事であったとしても、自己を磨き、深める修行になるという教えを老師より頂きました。今でも迷ったときの道標の一つとなっています。

この言葉は、今を生きる私たちに「働く意味」について大切な問いを与えてくれるような気がしませんか。

働くことを、単にお金を得るための手段と捉えるのか、それとも自らの学びと成長の重要な機会ととらえるのか。

そして何より、自分の仕事によって誰かの役に立てることに価値をおき、喜びや願いを持って向かうことが出来るのか。

自分の時間と労力の多くを注ぐ仕事への向き合い方によって、働くことの価値は「生きる意味」を伴い、大きく変わるはずと修行を通じて学びました。日々の勤めが喜心、老心、大心の教えに則っているか、定期的に振り返っていいこうと思います。

凡そ諸の知事・頭首・職に当たるに及びて、事を作し務めを作すの時節は、喜心・老心・大心を保持すべき者なり。

（典座教訓より）

文：荒木玲音





② 荒木千代子儀 密葬儀



③ 改修事業記念法要



① 太祖瑩山紹瑾禪師 700 回大遠忌予修法要

太祖瑩山紹瑾禪師

七〇〇回大遠忌予修法要

令和五年四月五日、宇都宮市の戸祭山祥雲寺様に於て行われた大本山總持寺開祖太祖瑩山紹瑾禪師の七〇〇回大遠忌の予修法要に、徒弟の玲音が鐘司の役で随喜して頂きました。

お祖師様の法要を大遠忌と呼び、曹洞宗では五〇年に一度特別な法要が行われ、来年度令和六年度が瑩山紹瑾禪師の七〇〇回大遠忌法要となります。現在その一年前にあたる本年に、全国の各叢林にて予修法要が執り行われています。

栃木県曹洞宗青年会総会

令和五年四月二十四日、栃木県曹洞宗青年会総会が開催され、徒弟の玲音が執行部員（会計補佐）として補任されました。青年会活動を通じて古教照心の示訓を旨に自己の研鑽に努めて参ります。

故荒木千代子儀 密葬儀

令和五年三月二十四日、芳全寺寺族 故荒木千代子儀の密葬儀を親族内で執り行いました。

本堂前エントランス改修

起工より約一年という長きにわたり、ご不便をおかけしておりましたエントランス改修工事が完了、竣工致しました。

この度の改修事業を記念し、「令和の阿弥陀如来縁結び記念事業法要」を執り行い、久下田大仏胎内に御寄進者名を記載したご芳名帳を奉納致しました。

ホームページ改修

インターネット上の玄関口と言えるホームページを刷新致しました（玲音の手作りです）。後世に残すお寺の歴史など、今後更新予定です。ぜひご訪問下さい。

合掌



令和五年六月 発行所 蟠龍山芳全寺 栃木県真岡市久下田八〇一

電話 0285-74-0134 発行・編集：芳全寺

2023 年の回忌法要早見表

1 周忌	令和 4 年 (2022) 逝去
3 回忌	令和 3 年 (2021) 逝去
7 回忌	平成 29 年 (2017) 逝去
13 回忌	平成 23 年 (2011) 逝去
17 回忌	平成 19 年 (2007) 逝去
23 回忌	平成 13 年 (2001) 逝去

※休日は混み合いますので、お早めにご相談下さい。

編集後記

寺報「芳蓮」をご覧いただき、ありがとうございます。この寺報は、芳全寺の「芳」と、仏教にゆかりの深い「蓮」をかけ合わせ「芳蓮」という名前にしました。極楽へ生まれる人の心の特徴を表す「蓮華の五徳」が芳全寺を通じて皆様が届きますように、という願いを込めさせていただきます。

檀信徒様とお寺のご縁をつなぐきっかけとなるよう、この寺報を育てていきたいと思えます。稚拙な紙面ながら、今後もお付き合ひ頂ければ幸いです。

荒木玲音